

---

# アカイヒカリ

龍ヶ崎 雄斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アカイヒカリ

### 【Nコード】

N2577F

### 【作者名】

龍ヶ崎 雄斗

### 【あらすじ】

夕陽が光るある時刻、ある場所で、少女は少年のある告白を聞く。

## （前書き）

少しでも気分を悪くするような表現方法を用いておりますが、大げさな程はございませんのでご安心ください。

沈みかけた太陽が何かを照らしだすように赤く輝いていた。  
学校の校庭ではまだ残っている子供たちが元気よく走り回っている。

少年 彼はぼんやりと照らし出されたそれを見下ろしていた。  
虚ろの眼球が子供の動きに合わせて右へ左へと動く。

少女 彼女はそんな彼を横に立ってのぞき込んでいた。その瞳もまた、濁っている。二つの穴が少年を見上げている。

「今日は夕日が綺麗だなあ」

彼は上の空のまま、言う。静かな微笑みに、少しだけ狂気を含ませながら。

「そうだね」

彼女は夕日には目もくれていないのに、そう返事をする。彼をじつと捉えたまま。

「こんな綺麗な夕焼け、見たことないや」

少年は一步踏み出す。下では恐ろしく固いコンクリートの海が少年を見上げている。彼と彼女は今、屋上の金網を越えた先に立っているのだ。

「うん、私も」

一瞬風が吹き、彼の前髪を揺らす。彼女はそれを横目で見送った。そしてすぐ少年に目を戻す。

「何であんなことしちゃったんだろ」

今はまだ遠くにある地面を見つめながら、彼がそつと呟く。後一步でも前に出れば、地面が目の前に迫ってくるだろう。

「図工の居残りで木箱を作っていたんだっけなあ」

学校のせいで影になった地面を見据える彼。少女は無言で彼の隣に立ってずつと彼を見ている。

「一緒に居残りさせられた女の子がいて、色々お話してたんだっけ」

彼のすぐ上を、カラスが何匹か鳴き声をあげて飛んで行った。かあ、かあ。

彼はそれを仰ぐ。

「でも木箱の作りが変だよって言われて、僕は怒った。だって一生懸命作ったのに。居残りまでして作ったのにさ、ひどいよ」

言葉に感情が交じってはいたが、彼は相変わらずまるで夢を見ているかのようなとろんとした表情をしていた。

「だから僕、持ってた金槌で、女の子の頭をたたいたかった」

彼は手を振り上げて、振り下ろす。彼女はその動きを目だけで追った。

「そしたら簡単に割れちゃった。血がびゅーびゅー噴き出して、あの子、倒れて動かなくなっちゃった」

また風が、今度は強く吹いた。子供たちがばいばーいと叫ぶ声が、彼の耳に小さく入ってきた。

「殺したの？」

驚きもせず、また泣き出しもせず、彼女は無表情のまま、尋ねる。彼は地面を見つめたまま、頼りないくらい小さく呟いた。

「まさか死ぬなんてさ、思わなかった。人間の頭って、案外柔らかいんだね」

とんかちで殴っただけで死ぬんだね。最後は独り言のように付け足す。

「どうするの？」

彼の瞳を覗き込むようにして、ゆっくりな口調で彼女はもう一度問う。

彼はふと彼女のほうを向いたが、目は彼女を通り越して別の何かはたまた自分の中の何かを見つめていた。

「僕、人を殺しちゃったんだ。そんな僕は、生きてる価値がない」  
死ぬしかないんだ。僕なんか。

彼がおぼつかない足取りで、一歩踏み出した。狂気を帯びた目で、夕陽をしっかりと見つめながら。

足が宙を踏み、彼の体はゆっくりと落下していく。冷たいコンクリートの海に引っ張られていく。

宙を舞いながら、彼が夕陽に向かって手を伸ばすのを、彼女は見た。

「夕陽、綺麗だなあ」  
ぐしゃ。

柔らかい何かを、壁に叩きつけたような音が、下から響く。少女は一步踏み出して地面を覗き込んだ。

そこには血の海に溺れ、糸の切れたマリオネットになった彼女が、彼女をぼんやりと見上げていた。手が、何かを求めるように伸びている。

それを見て、そのまま彼女は正面に目を移した。  
わずかに顔をのぞかせた夕陽が血のように赤い光を放ち、彼女を見つめ返している。

やがてそれはゆっくりと下のほうへと沈んでいった。

「さよなら」

彼女の掌が、金網をスーッと通り抜けた。

(後書き)

気づきましたか？

『彼』は『彼女』に話しかけていたのではなく、一人で喋っていたのです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2577f/>

---

アカイヒカリ

2010年10月11日01時15分発行